



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの経験の不平等
Author(s)	大澤, 真平
Citation	教育福祉研究 = Journal of Education and Social Work, 14: 1-13
Issue Date	2008-03-28
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/39607">http://hdl.handle.net/2115/39607</a>
Right	
Type	bulletin (article)
Additional Information	



Instructions for use

## 子どもの経験の不平等

大澤 真平

### はじめに

世代に渡ってある階層や集団の人々が貧困に在り続けることは「貧困の世代的再生産」<sup>1)</sup>(青木 2003) という概念でとらえられる。子どもの教育と福祉に関わる事柄が家族資源<sup>2)</sup>に依存する構造のなかでは、実質的な「機会の平等」が保障されなければ、家族資源の乏しい家庭に貧困・不平等が集中する。本研究は、この「貧困の世代的再生産」について、社会階層による子どもの経験の違いからアプローチを試みたものである。

子どもにとって貧困は多元的な問題である(Esping-Andersen=2001:132)。日本の社会においても、生育家族の低所得や不安定就労、ひとり親家庭など家族の不安定、母子家庭に見られる賃金と雇用のジェンダー格差、養育ケアの困難、住宅環境の不備など、ひとつの不利は他の不利を招き、貧困の問題は累積して子どもに影響を及ぼす。アメリカなどで実施されている大規模なパネル調査からは、子ども期の貧困経験は学業成績や未婚出産率などに関連を持つことや、成人後の低所得・低収入につながる事が指摘されている<sup>3)</sup>(Duncan, Brooks-Gunn and Smith 1998; Corcoran 2001)。

貧困にある子どもは、このような不利の累積のなかで、家族の持つ資源の不平等からもたらされる影響を受ける。このような家庭に対し、もちろん経済的な支援は意味を持つが、子どもを主体に考えると、必要なことは教育や就職の機会といった、人生の局面を開く場面における、選択の自由と幅が保障されていることである。貧困にある子どもが再び貧困に陥らないよう、社会移動の可能性を確保すること、すなわちライフチャンスを保

障することが必要であると考えられる。

日本における社会階層とライフチャンスについては、親の職業や学歴などの社会的背景と子どもの学業達成に関連があることや(浜島 2001; 荻谷 2001)、教育費負担の「家族依存」(青木 2007)から、子どもの教育機会が実質的不平等であることが指摘されるなど、子どものライフチャンスは家族資源によってその享受度に差を生じ、結果として社会階層が世代を越えて再生産される可能性が示唆されてきた。社会的排除の視点からは、教育と労働市場からの「排除」の枠組みが示され、排除する制度や機構側の問題としてライフチャンスの制限を明らかにしようとする試みもみられる(妻木 2005)。また、生活保護受給母子世帯への聞き取り調査では、経済的な問題と低学力が選択肢を狭め、将来展望を描くことを困難にさせていることが指摘されており(小西 2003)、問題は構造にも子どもの認識にもまたがって存在していると考えられる。

### 1. 研究目的と分析視角

貧困・生活困難にある子どもにとって、学力・学歴や教育費負担など、制度的・経済的な問題は、構造的にも認識的にもライフチャンスを大きく制限する。しかし、子どものライフチャンスを考えるとき、その実現の手段や機会の存在とともに、子ども自身がどのような「人生の見込み」(Rowls=2004:95-4)の観念を持てるのかを問う必要がある。すなわち、貧困にある生活のなかで、そもそも社会移動をもたらすような将来展望そのものを持つことが難しいのではないだろうか。そこで、本研究では、将来展望の幅を持つための子どもの経験そのものが、家族資源への依存構造のなかで、

貧困・生活困難層に不利となっており、それがライフチャンスを制限しているのではないかと考え、これを把握することを目的とした。

子どもの経験をとらえるにあたって、二つの観点を設定した。ひとつは、子どもがどのような体験をしたかである。子どもは多様な体験のなかで、その能力を伸長させ、興味関心の幅を広げていく。子どもに関する事柄の多くが市場化されているなか、ライフスタイルとして子どもに何を「選択」できるかは、家族の資源に大きく影響される。家庭の養育態度が意識的かどうかに関わらず、次世代への親としての期待が、物的な事柄や、絵本を買い与えたり、旅行や習い事の経験といった形で可視化されるとも言えよう。

もうひとつは、子どもがどのような社会関係を持ったかである。モデルの限定性が将来展望と進路選択を規定する影響(安田1998;内田2005)を考えると、意味ある出会いは重要な経験となる。また、モデルに限らず周囲の他者との関係から相対性を持つことは、自己の認識する世界と選択肢を広げ、同時に、自分の置かれている状況と立ち位置を認識することを可能にする。それは貧困・生活困難にある子どもにとって「再生産」から脱却するために欠かせない視点である(Nussbaum=2005:168)。相対化する契機が無いなかでは、ライフチャンスが限定されているという認識を持つことができない。そこで、子どもの将来展望や進路選択に影響を与えた他者との関係を、準拠集団<sup>4)</sup>(Merton=1969:256-58)から把握した。

どのような経験を積むことが子どもの成長発達に意味を持つかは一概には言えないが、貧困にある子どもが、その社会における一般的な経験を相対的にわずかしか持つことができず、それが子どものライフチャンスに影響を与えているとすれば、貧困問題としてそれを明らかにする必要がある。

具体的には、生活保護や児童扶養手当受給、その他経済的に困窮した状態にある世帯で子ども期を過ごした若者12名に対するインタビュー調査を行った。対照として、生活の安定している世帯

の若者4名にも同様のインタビューを行い、社会階層差による経験の違いを確認した。調査対象者は、全員高校卒業を前提とした。中卒、高校中退者の事態はより深刻であるが、「貧困の世代的再生産」から抜け出すには、高校卒業までのライフチャンスを持っていても、それだけでは十分ではないと考えられるので、このように設定した。インタビューの実施は2007年8月から10月にかけて行い、対象者の選定は、北海道内の進路多様校に勤務経験のある複数の高校教諭らから、卒業生を紹介してもらった形で行った。

## 2. 貧困・生活困難層としての生育家族

表1に、調査対象者の生育家族の基本属性についてまとめた。EからPまでの12人の調査対象者の生育家庭が、貧困・生活困難(以下、「困難層」)にある世帯、AからDの4人は対照として生活の安定している世帯(以下、「安定層」)である。以下、「困難層」を中心に議論を進めていく。「困難層」の家庭の内訳として、3世帯が生活保護受給世帯、4世帯が児童扶養手当受給世帯、4世帯は福祉受給を受けていないものの低所得水準にある世帯で、1世帯が退職者世帯である。

世帯構成について、「困難層」の2/3にあたる8世帯がひとり親世帯であり、特に母子世帯において、生活困難が集中している。親学歴についてみると、「安定層」に比較して構成が異なり、低学歴層に偏っている。また、その職業については土木や製造といった職種や、非正規雇用形態など「低所得・不安定就労」と言える就業状況がみられる。

### \*生活困難に関する事例

**【事例J：21歳女性】**「家庭の経済状況は良くない。普通にガスとか止まった。…、大変なのは、ガス、電気、水道はたぶん(止まったことは)無い。冷蔵庫にはほとんど物がなかった。」

**【事例P：21歳男性】**「生活が大変だなとは感じていた。朝から晩までお母さんは働きっぱなしだから、本当にお金無いんだなって。熱

表1 「生育家族の基本属性」

	ID	年齢	性別	福祉受給	世帯構成	父学歴	母学歴	父職業	母職業	家族の困難
生活困難層	E	21歳	女性	生活保護		—	中卒	無職(土木)	パート	父：糖尿で失明
	I	24歳	女性	生活保護	母子世帯	高卒	中卒	—	介護＝パート	借金
	M	19歳	女性	生活保護		中卒	中卒	無職(土木)	パート	父：心臓病 弟：知的障がい
	G	21歳	男性	児扶手	母子世帯	—	大卒	—	パート	家族内不和
	J	21歳	女性	児扶手	母子世帯	高卒	高卒	離別(運送)	露天商	
	N	21歳	男性	児扶手	母子世帯	—	—	離別(製造)	パート	
	P	21歳	男性	児扶手	母子世帯	—	高卒	—	食品加工	
	F	20歳	男性		母子世帯	大卒	専門卒	離別(廃品回収)	看護師	借金
	H	24歳	男性			—	—	土建	食品加工＝パート	父：冬期収入無し 妹：不登校
	K	22歳	女性		父子世帯	中卒	中卒	組立て工＝派遣	死別(パート)	母：死別 父：脳梗塞・糖尿 精神神経疾患
	O	19歳	男性			中卒	高卒【定】	運転手＝臨時	パート	
L	24歳	女性		父子世帯	高卒	高卒	退職(自衛官)	離別(パート)	借金 父：精神神経疾患 妹：不登校	
生活安定層	A	21歳	女性			大卒	高卒	銀行員	銀行員＝パート	
	B	21歳	女性			大学院卒	大卒	公務員【研究】	福祉施設職員	
	C	21歳	男性			大卒	大卒	会社員	パート	
	D	22歳	男性			高卒	高卒	会社員	専業主婦	

注：親職業は直近の職業を表している。「—」は不明を表している。( )は、離死別についてはその時の職業、失業についてはその前の職業を表す。児扶手＝児童扶養手当。【 】内は、その詳細な内容。

を出しても親の勤め先の電話番号がわからなくて、お姉ちゃんが看病してくれた。」

【事例1：24歳女性】「(自分が)中2まで母親は小さい飲食店で働いたり、内職で昆布巻きしたりとか、花屋で働いたりとか、焼き肉やさんで働いたりとか、仕事はしていた。」

「困難層」の生育家族は、概して低学歴、低所得・不安定就労であり、ひとり親世帯が大半を占め、社会的に不利な条件にあった。また、疾病、失業、借金、死別・離別などに加え、住環境や養育ケアにも困難を抱えるなど、多元的な困難の累積の中に置かれていた。貧困は家族の脆弱性をもたらし、家族の脆弱性はまた貧困をもたらし、ふたり親による性別役割分業を前提とする社会のなかで、ひとり親家庭は就労と家事・育児の負担が重くのし掛かることになる。また、ふたり親であっても失業、疾病、借金などによりその生活は困難な状況

に陥る。聞き取りでは、その生活について、経済的な困窮はもとより、就業場所の頻繁な変更や、家計維持のための長時間労働などが語られており、親子ともに落ち着いた生活を過ごすことに困難を抱えていた。

このような生育家族の脆弱性は、「一般的な家族形態」を維持すれば安定が増すといった問題ではなく、不安定な者どうしの同質的な結びつきのなかで、子どもの可能性を開いていく状態が構築されにくいことを示している。全体として「困難層」では、生活維持を優先せざるを得ず、先の見通しが立たない状況であった。それは、子どもの発達を支え、将来を見越した子育てをすることが難しい環境でもある。このような中、「困難層」の子どもはどのような経験をしてきたのであろうか。

### 3. 体験としての経験

#### (1) ライフスタイルの特徴

「困難層」の子どものライフスタイルは、「安定層」と比較して大きく異なるものであった(表2)。ここでは、親の次世代への期待と家族資源に大きく影響を受けると考えられる幼少期と児童期についてのみ示した。「安定層」では、ほぼ全ての経験を子どもは獲得しているのに対し、「困難層」では多くの項目で、経験が「なし」や乏しい状況であることが示されている。「困難層」でも家庭内での事柄については不十分ながらその機会を整えようとしていたが、より機会費用のかかる事柄(塾・習い事、余暇活動の内容)についてはその体験が乏しく、子どもの経験を得る機会が市場化された現代において、家族資源の格差によって子どもの体験できる内容が異なっていることが示された。これらの体験としての経験は、子どもにとって何を意味するのか、聞き取りからその特徴的な側面をいくつか示す。

#### \*「絵本」と「読み聞かせ」に関する事例

【事例I：24歳女性】「絵本はいっぱい家にあった。お母さんがたくさん買ってきてくれた。中古とかだけど、昔話とか全部集めてくれて。読んでくれたってのは無かったかもしれないけど、買ってくれた。今だに取って置いてくれる。子どもができたときって。」

「困難層」でも多くの家庭で子どもに「絵本」を買い与えていた(12事例中9事例)。しかし、「読み聞かせ」の有無については、その半数以上が「なし」であった。多くの家庭で、事例Iのように、次世代への親の期待はみられるが、それを有効にしようとする所まで手が回らない(あるいはしない)様子がうかがわれる。そこからは、「絵本」を与えることが物的な働きかけだけに終わってしまい、子どもの発達を支え、その能力を伸ばす機能が十分に働いていない環境に「困難層」の家庭はあると考えられる。

#### \*「余暇活動」に関する事例

【事例P：21歳男性】「旅行とかは母親が仕事ばかりなので行けなかった。近くに遊園地みたいなのがあって、連れてって言うんだけど、一度も行けなくて、今の所に(小4で引っ越して)来てから、初めて家族で弁当作って出かけた。」

「余暇活動」は何らかの形で行われており、多くの家庭で子どものために時間とお金を捻出し、非日常を経験させようとする意志があったとみていだろう。しかし、経済的な制約以外に、事例Pのように母子世帯では物理的な時間が取れなかったり、病気で車の運転ができなくなるなど、生育家族の累積する困難のなかで、それは乏しいものとなっている家庭が多かった(12事例中8事例)。「余暇活動」の経験にみられる、「安定層」との経験内容やその頻度の違いは、やはり家族資源の違いがもっとも大きな影響を与えていると考えられる。

#### \*イベントに関する事例

【事例K：22歳女性】「クリスマスプレゼントはなかった。ケーキは食べた。次の日友達か、昨日枕元にプレゼントがあったって話を聞いて、ふーんそうなんだって。親に文句言わなかった。ケーキ食べたからいいかって感じだった。誕生日祝いは無かった。」

「困難層」でも、イベントがあったかどうかだけをみると、「安定層」と同じようにとらえてしまいがちであるが、その内実は、子どもにとってかなり制約感を抱かせるものであった。子どもは一般的にはその養育を親に頼るしかない。それゆえに、経済的な困難に対する思いは、親への不満という形では表出しにくい。事例に見られる、クリスマスや誕生日のように、容易に他者と比較できるイベント経験を通して、親への感謝と愛情の気持ちが育まれると同時に、他者との違いや貧しさを認

表2 「子どもの体験としての経験」

ID	年齢	性別	絵本	読み聞かせ	おもちゃ	余暇活動	イベント	学習環境		塾・習い事	
								部屋	教材	補助的教育	習い事
E	21歳	女性	すこしあり	なし	ほとんどなし(人形ひとつ)	釣り、キャンプ、海水浴、遊園地	ケーキ・プレゼント(小物)	○	△	通教(小1)	書道*
I	24歳	女性	たくさんあり(古本)	なし	あまりなし(外遊び中心)	海水浴、動物園、ワカサギ釣り	ケーキ・プレゼント(小物・お菓子)	×	△	塾(小4-6)	なし
M	19歳	女性	なし(弟に凶鑑あり)	なし	ほとんどなし(人形ひとつ)	キャンプ	ケーキ・プレゼント(小物)	○	△	塾(中3-高3)	なし
G	21歳	男性	なし	なし	ほとんどなし(人形ひとつ)	キャンプ	イベントなし	○	○	なし	なし
J	21歳	女性	たくさんあり	あり	たくさんあり	動物園	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	○	○	なし	そろばん*
N	21歳	男性	すこしあり	あり(父親に)	-	遊園地、動物園	ケーキのみ	○	○	塾(中3)	ピアノ、バスケット少年団
P	21歳	男性	あり	なし	ほとんどなし(ミニカーひとつ)	遊園地(一度だけ)	ケーキ・プレゼント(鉛筆、靴下など)	×	×	なし	なし
F	20歳	男性	なし	なし	あり	海水浴、動物園	ケーキ・プレゼント(現金)	○	×	塾(小5-6、中2-3)	そろばん
H	24歳	男性	あり	あり	たくさんあり	家族旅行、遊園地、水族館、テーマパーク	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	×	○	なし	野球少年団
K	22歳	女性	すこしあり	なし	ほとんどなし(トラップひとつ)	釣り(親の付き添い)	クリスマスケーキのみ、誕生日祝い無し	共用	×	なし	ピアノ、生け花、お茶
O	19歳	男性	すこしあり	なし	たくさんあり	なし(買物程度)	プレゼント(金銭面で遠慮)	×	△	塾(中1-3)	なし
L	24歳	女性	たくさんあり	あり	たくさんあり	家族旅行、動物園、水族館、キャンプ	プレゼント(欲しいもの)	○	×	なし	なし
A	21歳	女性	あり	なし	あり	キャンプ、TDL、映画館、博物館	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	○	○	家:中3時:3ヶ月	ピアノ、そろばん、吹奏楽少年団、水泳
B	21歳	女性	たくさんあり	あり	あり	キャンプ、海外旅行、家族旅行、映画館、美術館	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	○	○	塾:(小6-中3)	バレエ、習字、英語
C	21歳	男性	たくさんあり	あり	あり	遊園地、映画館、演劇、美術館、TDL	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	共用	○	塾:(中2-3)	水泳、サッカー少年団
D	22歳	男性	たくさんあり	あり	あり	キャンプ、家族旅行、遊園地、博物館、航空ショー、コンサート	ケーキ・プレゼント(欲しいもの)	共用	○	塾:(小4-高3)	水泳、ピアノ、習字

注:濃い網掛け=無し 薄い網掛け=ほとんど無し、または相対的に少ないか不十分。「-」は不明、またはNo Data。

「絵本・おもちゃ」については、「小さい頃絵本・おもちゃがどれくらいあったか?」、「読み聞かせ」については、「絵本を読んでもらったか?」に対する返事。

「余暇活動」については、「小学校時代、親にどんなところに連れて行ってもらいましたか?」、「イベントにどんなお祝いはどうでしたか?」に対する返事。「TDL」東京ディズニーランド。「部屋」:勉強部屋 「机」:勉強机 「教材」:補助教材 「補助的教育」:塾・家庭教師・通信教材。「\*」:数ヶ月のみ 「○」:あった・買った・買ってもらった 「△」:すこしだけ 「×

生活困難層

生活安定層

識し、「仕方ない」、「～があるからいいか」といった我慢や制約の感覚が身に付いていくことになる。これは「おもちゃ」についても同様の傾向が見られた。

#### \* 塾・習い事に関する事例

**【事例L：24歳女性】**「習い事は一切してませんでした。水泳とかスキーとか、だから苦労しました。近所の子でスイミングスクールとか、習字とかやってる子がいて、いいなって。親に（行きたいと）言ったことはあるけど却下されました。」

体験としての経験のなかで、最もそれが乏しい項目が「塾」「習い事」の経験であった。学校以外での学習や、子どもの才能を伸ばす機会を得ようとするとき、子どもがやりたいにしろ、親がやらせたいにしろ、そのような経験を得る機会は市場から購入する必要がある。「困難層」の子どもが「学校の勉強についていけない」とき、親も教えることができず、頼れる社会関係もなければ、お金を支払ってやり直す機会を得なくてはならないのが現状である。問題は「困難層」の子どもが「塾」や「習い事」に行けないという事ではなく、経験を得る機会が市場化された現代において、子どもの経験の差が、家族資源の格差によって大きく異なる可能性があるということである。

#### (2) 子どものライフスタイルから見えるもの

「困難層」の家庭では、子どもへの期待はあるが、困難な生活のなかでその期待を形にする事が難しい状況にあったと言えるだろう。加えて、困難層では絵本を買い与えられても読み聞かせの経験が無いなど、それは物的な働きかけだけに終わり、子どもの発達を支え、その能力を伸長させる機能が十分に働いていない環境にあった。さらに、他者との比較を通して貧しさを認識し、我慢や制約の感覚が身に付いていく様子が語られるなど、単に頻度や内容が乏しいだけではなく、その内実も異なっていた。

今回の調査では親世代への聞き取りは行なっ

ていないため、子どもの能力を伸長させる機能が働かないことや、体験への価値期待について、親世代もまた貧困・生活困難に育ったことが影響しているのか、貧困・生活困難にあることそのものが制約要因になっているのかについては判断することはできない。おそらくその両方の要因が関連していると考えるのが妥当であろう。

とはいえ、家族資源の不足が子どもの経験を左右することは間違いない。各経験のうち、どれがどのように子どもの成長発達に影響をもたらすのかは、経験の内容をはじめ、子どものおかれた状況や発達段階に応じて、必要とする時期に必要な経験が適切にもたらされたかなど、多くの要因が関係しており、一概に述べることはできない。しかし、総体として、体験としての経験が子ども期の能力、知識、世界観などを形作り、自立へ向けたその後の青少年期の過ごし方や、将来展望、進路選択などに影響をもたらすと考えられる<sup>5)</sup>。

#### (3) 子どもの将来展望

これらのことは、将来の夢にも関連を持っていた。表3は子どもの将来の夢を聞いたものである。小中学生段階では、その年頃の子どもが接することのできる幼児教育や学校などの世界、テレビや絵本・おもちゃなど身の回りの世界、そして、それまでに体験したことから将来の夢がもたらされていた。一方で、「安定層」と「困難層」には違いも見受けられた。

#### \* 小中学校時代の将来展望に関する事例

**【事例A：21歳女性】**「小さいときは、ピアノの先生になりたかった。けっこうずつとなりたいと思ってましたね。(ピアノが)自分も好きだったし、ピアノの先生もすごいカッコよかったんですよ。」(安定層)

**【事例K：22歳女性】**「将来の夢は、小学校ではパン屋さん、スーパーのレジとか。母親の病気を看病してから、看護師とかも希望になった。」(困難層)

**【事例H：24歳男性】**「夢を持たなくなったのは中学生の頃。普通に生きりゃいいかって。」

表3 「子どもの将来展望」

	ID	年齢	性別	小学生	中学生	高校生
生活困難層	F	20歳	男性	農業	農業	麻雀屋
	G	21歳	男性	なし	なし	なし
	H	24歳	男性	ラーメン屋	なし	なし
	M	19歳	女性	動物にかかわる仕事	トリマー	接客業
	P	21歳	男性	スポーツ選手	就職して調理師修業	就職して調理師修業
	E	21歳	女性	看護婦	介護福祉士	介護福祉士
	I	24歳	女性	保母さん	なし	ネイルアーティスト
	K	22歳	女性	パン屋さん・スーパーのレジ	看護師	看護師・介護士
	L	24歳	女性	なし	絵を描く仕事	クリエイティブな仕事
	J	21歳	女性	保母さん	保母さん	介護士・カウンセラー
	N	21歳	男性	警察官	美容師・調理師	調理師・電気機械関係
	O	19歳	男性	F1レーサー	なし	『カッコいい生き方』
	生活安定層	A	21歳	女性	ピアノの先生	OLにはなりたくない
B		21歳	女性	幼稚園の先生・バレエの先生	幼稚園の先生	CA・アナウンサー・教員 養護教諭・塾講師・販売員
C		21歳	男性	大工	サッカーコーチ・フィジカル トレーナー	漠然と教育に関する仕事
D		22歳	男性	小学校の先生	小学校の先生	これと決めずに幅広く

注：CA（キャビンアテンダント）

環境的に悪かったのかわかんないけど、とりあえず早く仕事したいなってのがあった。他のやつらの夢とか聞いても、ああそうかくらいで何も思わなかった。」（困難層）

どちらも自分の見聞きし、体験した世界が自分の将来の夢を形作っていた。しかし、「安定層」ではピアノの先生やサッカーコーチなど、習い事や少年団活動から夢を持つケースがみられるのに対し、「困難層」では、親の病気や家事分担など、家族の脆弱性にまつわる体験から看護師や調理師などの夢を持つケースがみられた。また、「困難層」では将来の夢を「なし」とする回答も多く、将来展望がその生活によって方向付けられるとともに、夢を持つこと自体に困難さがあった。

#### 4. 社会関係としての経験

##### (1) 重要な他者—将来展望をもたらすの誰か—

表4は、将来展望に対する影響を受けた、重要な他者についてまとめたものである。「安定層」で

は、両親以外に影響を受けた複数の大人と社会関係を持っており、家族関係を基本として自分の世界を広げながら将来展望を形作っていく様子がうかがわれる。一方で、「困難層」では「親」のみをあげるケースか、「なし」とする回答がほとんどであった。

##### \* 重要な他者に関する事例

【事例K：22歳女性】「生き方のモデルは父親。それはやっぱり親の背中を見てきたから。お父さんは大変な仕事でも文句言わずやってきたから、それは尊敬してるから、お父さんみたいな社会人になりたいなって。」

「親」は働き方のモデルになっており、「がんばって働く」という価値観を内面化する対象になっていた。しかし、ハードワークしないことが生活困難の主要因ではなく、低所得・不安定就労や、重なる困難がそれをもたらしていることを考えると、再生産からの脱却にはその構造外のモデルが



表4 「子どもの社会関係：重要な他者」

	ID	年齢	性別	重要な他者	ID	年齢	性別	重要な他者
困難層	F	20歳	男性	小学校高学年の担任	I	24歳	女性	なし
	G	21歳	男性	なし	K	22歳	女性	父親
	H	24歳	男性	なし	L	24歳	女性	(「マンガの影響を受けた」)
	M	19歳	女性	なし	J	21歳	女性	なし
	P	21歳	男性	母親、祖父	N	21歳	男性	情報(パソコン)の先生
	E	21歳	女性	両親(特に母親)	O	19歳	男性	社会人のボード仲間
安定層	A	21歳	女性	両親・ピアノ教室の先生 中学校の顧問の先生	C	21歳	男性	母親・高校の顧問の先生 高校の部活の先輩
	B	21歳	女性	両親(特に母親) 高校の進路相談をした先生	D	22歳	男性	母親・叔父・塾講師 中学の顧問の先生・高1担任

注：「あなたの人生のなかで、生き方や考え方に影響を与えたり、モデルになったり、その他、あなたにとって特別な人は誰ですか。」に対する回答。「顧問の先生」は、部活動、委員会などの顧問。

必要とされる。そういう点で、重要な他者を「なし」と答えた事例も含め、「困難層」の子どもは社会関係が乏しいだけではなく、社会移動のモデルとなるような経験を得られていなかった。

## (2) 準拠集団からみる進路選択

進路選択に関する社会関係も同様であった。表5に「困難層」の進路選択の過程を示した。高校卒業後は「困難層」12事例のうち、高卒就業したものが10事例、専門学校等に進学したものが2事例であった。進路選択に影響した準拠集団の持ち方の違いから、全体を「所属集団準拠型」「比較準拠集団獲得型」「規範的準拠集団獲得型」の3つのグループに類型分けした<sup>9)</sup>。このうちもっとも多くの事例(9事例)が当てはまり、「困難層」の進路選択の典型ともいえるのは「所属集団準拠型」である。

### \*進路選択に関する事例(所属集団準拠型)

【事例H：24歳男性】「小学校からできなかったけど、勉強しなきゃってプレッシャーはなかった。…、中2で勉強できないって思って、Q高校でいいかって。たいして夢も持っていないし。…、Q高校は下というイメージだけど、とりあえず就職すれば地位とかは関係なかった。…、他人がどうでも俺には関係ないって。友達はどこに行っても友達だから。」

事例Hは小学校段階から学力不振で、中学校段階で勉強に対する意欲が失われていた。また、家庭は経済的に困窮しており、本人が中学からアルバイトをして生活費の一部を得ていた。そのなかで、入学できる高校から高校卒業後の選択まで、「二択が無かった。一本道だった。」という進路選択を余儀なくされることになる。下というイメージの高校にいること、勉強ができないこと、友達との関係、それら全てを自分のなかで合理化することで、「自分は自分らしく」過ごしてきたという。そこからは、所属集団以外に準拠する集団を持たず、他者との相対化された視点の無い姿が浮かび上がる。

この他に、兄弟が中卒や高卒で働いているからといった理由や、進学希望はあるものの、家庭の経済的事情を抱えるなか、同級生の多くも就職するという理由で自分もそうしたという事例など、この類型では所属集団に準拠枠を持つことで、選択の自由と幅が極めて限られた進路選択が行われていた。

### \*進路選択に関する事例(比較準拠集団獲得型)

【事例J：21歳女性】「周り見てたから最悪時(制高校)でいいかって思った。…、私の場合は夜遊びでつるんでる友達がいたから、(母親が)このまま地元に残っていてもまずいと思って(離れた普通科の高校へ進学さ

表5 「『困難層』の進路選択状況」

類型	ID	小学校	中学校	高校	高校卒業後	進路希望
①	F 20歳 男性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (下位)	就職	就職希望
	G 21歳 男性	小学校→ (中位)	中学校→ (中位)	進路多様校→ (中位)	就職	就職希望
	H 24歳 男性	小学校→ (中位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (中位)	就職	就職希望
	M 19歳 女性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (上位)	就職	就職希望
	P 21歳 男性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校 (上位)	専門学校	就職希望
	E 21歳 女性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (下位)	就職	専門学校希望
	I 24歳 女性	小学校→ (中位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (中位)	就職	専門学校希望
	K 22歳 女性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (下位)	就職	専門学校希望
	L 24歳 女性	小学校→ (上位)	中学校→ (中位)	進路多様校→ (上位)	就職	専門学校希望
②	J 21歳 女性	小学校→ (下位)	中学校 (下位)	進路多様校 (上位)	就職	専門学校希望
	N 21歳 男性	小学校 (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (中位)	高等技専	専門学校希望
③	O 19歳 男性	小学校→ (下位)	中学校→ (下位)	進路多様校→ (上位)	就職	大学進学希望 (夜間二部)

注：表中の枠の上下は、所属集団の位置づけの変更があったと本人が認識している箇所。

類型 ①所属集団準拠型 ②比較準拠集団獲得型 ③規範的準拠集団獲得型

( )内は本人による校内成績の位置づけ。斜体文字=重要な成績の位置づけの上昇。

高等技専=高等技術専門学院。

せられた)。…、高校の時は負けたくなかったし、(成績が)上がるとお母さんも喜んだよね。今まで無かったって。」

持つことができた。準拠枠の回復は、子どもの努力しようとする意欲を引き出し、可能性を広げるものであった。

\* 進路選択に関する事例(規範的準拠集団獲得型)

この類型では、事例のように親の介入や、離婚に伴う中学の転校(事例N)という形で、自分の所属していなかった世界へ置かれることにより、新しい準拠枠を獲得し、自分を相対化する機会を

【事例O：19歳男性】「一生懸命取り組むようになったのは、バイト先で知り合った先輩でRさんの生き方の影響。Rさんも自分と同じ

高校出て、大学の夜間2部を今年卒業する。この先どうなるのかわからないなら、今一生懸命生きるしかないと言われて、カッコいいと思って自分もそれからそうやってきた。自分は高校2年までは『抜け殻』だった。外の世界につながることで世界が広がった。』

事例Oは、重要な他者の体現する、非所属集団である大学の世界を目指そうとすることで、様々なことに「一生懸命」に取り組むようになり、学習への意欲も取り戻すことができるようになっていった<sup>7)</sup>。この類型は1事例のみであった。

### (3) 準拠集団から見えるもの

このように社会関係としての経験が、子どもに目標を与え、意欲を高め、将来展望の自由と幅を広げる可能性をもたらすことは小さなことではない。しかし、「困難層」の子どもは、多くが小学校段階から自己認識を学校的価値の下位に位置づけられており、学校段階が進むにつれ比較対象が限定されていき、相対化する契機が失われていた。また、同様の過程をたどった兄姉や友人を準拠枠とするなかで、ライフチャンスが限定されたものであるという認識が持てなくなっていた。これは、子どもの育ちにまつわる事柄や教育機会が家族資源に依存していることが、学校教育システムのトラッキング効果と相まって、子ども集団を同質化していく構造的な問題であると考えられる。

### (4) 社会関係を断ち切る貧困認識—家族依存の内面化—

最後に、社会関係としての経験に関して、子どもの貧困認識を確認する。専門学校への進学を希望しながらそれを断念した事例では、奨学金制度を利用することで過大な借金を背負うことに対する忌避感や、高等教育を受けた後の就職可能性への不安から奨学金利用をためらうことなどが語られていた。ここでは、そのなかで語られた、貧困認識の部分についてのみ取り上げる。

#### \* 貧困認識に関する事例

【事例L：24歳女性】「(進路に関して) 金銭的

な話だから、人に頼れない。先生には言っちゃってどうにもなるもんじゃないでしょうし。学校生活は学校生活で、家の中は家の中のこと。』

【事例J：21歳女性】「(生活は) 恥ずかしいじゃん。言いたくないし、家にもやっぱり連れて来たくない。普通の生活じゃないでしょ。恥ずかしいからやだ。」「自分も普通を装おう。家を出て学校へ行けば普通なんだと思う。別に外に出ればバレないみたいなの。』

専門学校への進学を断念した対象者からは、経済的な事柄に関わることは社会的な支援ではなく、自分たちの問題としてそれを解決しなくてはならないといった認識が聞かれた。そこには、実質的に経済的な資源を稼ぐ手段のない子どもが、教育機会に関する家族資源への依存を当然視している様子が見られる。

また、生活困難を他人に明らかにすることにはかなりの抵抗が持たれていた。「困難層」の子どもは極力「普通を装おう」としているため、社会生活のなかでは子どもの貧困・生活困難は可視化されにくい。「恥ずかしさ」の感情が子どもからの生活に関する支援要請を思いとどまらせ、他者からの気づきにくさをもたらしている。

貧困・生活困難にあることは、単に経済的な問題を抱えているというだけではなく、社会関係のつながりが断ち切られていくことでもある。それはまた、自立手段を持たずに養育され、全てを家族に頼らなくてはならない子どもにとって、家族資源が子どものライフチャンスを決めてしまう可能性を子ども自身が否応なく受け入れてしまうことにもつながっていた。

### おわりに

本研究では、いままで十分にアプローチされてこなかった、子どもの経験という観点から、貧困・生活困難にある子どもの状況を確認し、経験が社会階層によって異なるだけではなく、それが子どもの将来展望を描くことに不利をもたらしている

様子を明らかにしてきた。貧困・生活困難にある子どもは、従来から指摘されていた学力・学歴達成や教育の機会費用負担の困難さに加え、その経験からもライフチャンスが制限されたものになっていた。貧困・生活困難にある子どもが、不安定な生活を自ら選択していく（ように見える）のは、状況対処的に過ぎざるを得ない生活、興味関心を広げる体験の乏しさ、社会関係の限定といった状況から複合的にもたらされている側面があるだろう。

これらの状況を、家庭の養育責任の問題として単純に済ますことはできない。本研究で示したように、子どものライフスタイルが家族資源に規定され、教育制度が子どもの相対性を持つ機会を奪っていくなど、貧困・生活困難にあることが、制度的・構造的な問題と関連するなかで、貧困が世代的に継承していく仕組みがあることを、この問題の背景として理解しておく必要がある。

貧困・生活困難におかれた子どもは、抑圧された日常を過ごしており、のびのびと子ども時代を過ごしたとは言えないものであった。しかし、彼ら/彼女らからは、生活に対する不満よりも、むしろその生活を仕方のないものとして受けとめる語りが聞かれた。それは、期待水準を低く押さえられていることや、自分には事柄や機会が他者と同様に与えられてしかるべきだという感覚そのものを持っていないことからもたらされる、裏返しの意識の現れであるとも言えよう。そのなかで、貧困・生活困難にある子どもは、その乏しい「子どもの経験」から、意欲と能力の伸張が妨げられ、将来展望に対する迷いそのものが剥奪されていると考えられる。また、彼ら/彼女らの思いは、家族依存の内面化にみられるように、簡単に外部には表れてこないため、子どもの選択が自己責任と受け取られてしまう危険性もある。そういう点で、子どもに将来展望の幅を広げるような多様な経験を提供することと、彼ら/彼女らの状況を理解したうえで、偶然ではなく必然として社会関係の支援がもたらされる、そのような対策が求められるだろう。

残された課題として、子ども世代への聞き取り

の限界もあり、世代に渡る経験を通じた再生産プロセスの多面的な把握には至らなかった。また、今回の事例研究で得られた知見を、量的なデータとして収集する必要も残された。今後はこれらの課題を、貧困・生活困難層からの脱却ができた世帯との比較も考慮して、子どもの経験を通じた再生産過程の分析として進めたい。

#### 注

- 1) 青木(2003:11-29)は、貧困が生み出される直接の原因は、現代資本主義と市場経済の在り方そのものであるとしているが、貧困内部の構成が入れ替わる流動性を持つ再生産ではなく、ある集団や層が二世帯以上に渡って貧困を継承することを重視した概念であると述べている。
- 2) 宮島(1999:112-33)は、市場同様に競争的で文化的な有利さを争う社会的場において、家族の機能に対する要求が増し、その家族を通して生み出される社会的有利-不利や不平等が問題であるとの前提のもと、「資本としての家族」を試論的に述べている。家族による行為が、客観的には投資的行為にみなされ、効率や収益が問題にされる社会的場では、家族は「資本」として捉えられる。この「資本」は、経済学的意味での資本よりも複雑な変換過程と、予測困難な因果関係のなかでアウトプットを生じる。ただし、資本としてどのような家族の在り方が有効かを問うのではなく、社会的場において有効に働く資源の偏在(不平等)を問う必要があると指摘している。本研究では Bourdieu(1986)のいう「経済資本」「文化資本」「社会関係資本」を家族資源として念頭においている。
- 3) Corcoran(2001)は、パネル調査を検討した結果、3割の子どもが一時的な貧困を経験し、全人口の5%にあたる子どもは10年以上の長期に渡る貧困を経験すると述べている。また、子ども期における長期の貧困経験は、学力、教育達成、10代での妊娠、未婚出産、男性の非就業状態への効果よりも、成人してからの所得や収入に対する効果の方が大きいと指摘している。
- 4) 準拠集団(Reference Group)とは、個人がそれ

と関連づけることによって態度形成と自己評価を行う集団のことであるが、これは集団のみならず「準拠的個人」を含む概念である (Merton=1969: 256-58)。当該個人が集団活動に参加し、自他ともに成員として認知している集団を「所属集団」、そうではない集団を「非所属集団」といい、どちらも準拠集団となりうる (Merton=1969: 232-46)。準拠集団の機能は、その価値や規範に共感し個人が同一化や所属したいと願う枠となる「規範的準拠集団」と、個人が自身や他者を比較評価する枠となる「比較準拠集団」にわけられる (Kelly 1968: 77-83)。本研究でも、この2つの集団の枠組みを使用して、子どもの社会関係としての経験をとらえる。Mertonは、所属集団・非所属集団の概念と、内集団・外集団の概念を区別している。この内集団・外集団の概念も準拠集団論に含まれる (Merton=1969: 246-248)。

5) Chin と Phillips (2004) は夏休みの子どもの過ごし方について、その社会階層差を質的調査から明らかにしている。それによると、興味や才能を発達させる、夏休みの経験の機会の差が、社会階層の異なる子どもの「才能発達のギャップ」と「文化接触のギャップ」をもたらすという。Chin と Phillips は、それが年ごとに積み重なることで、子どもの将来のライフチャンスの不平等がもたらされるだろうと指摘する。経験の機会の差は、親の経済的な資源差だけではなく、社会関係や文化的な資源の差にもよっているという。

6) 「困難層」の子どもの多くは、生活実態そのものが下位に置かれ、早期からの低学力という困難を抱え、小中学校段階では成績下位グループに、高校段階では業績主義的な学校ランク付けで下位に置かれている。このような所属集団のみを準拠集団にすることは、自己の行動や評価が下位集団からしかもたらされないことを意味する。ここでは、このような状況下にあった類型を「所属集団準拠型」とした。「規範的準拠集団獲得型」「比較準拠集団獲得型」については、脚注4を参照。

7) 高校卒業の年には大学受験に失敗したが、その後、事例Oの本人から大学の夜間二部に合格したとの連絡を受けた。高校時代のアルバイトと、高校を

出て1年間で貯めたお金を元手に、奨学金を利用して授業料の目処を付けたいと語っていた。新たな準拠集団を得られたことは、その後においても強い人生の支えになるのかもしれない。事例Oでは、両親も健康であり、他の事例ほど困難が累積していない条件にあり、それが準拠枠からもたらされた意欲を持ち続けられた要因かもしれない。貧困とは、物質的な欠乏のみでなく、精神的荒廃をもたらす貧困な生活状態として一般に理解されるが、他の事例ではアスピレーション自体が奪われている可能性がある。

### 参考文献

- 青木 紀編著 (2003) 『現代日本の「見えない」貧困—生活保護受給母子世帯の現実—』 明石書店。
- 青木 紀 (2007) 「第8章 学校教育における排除と不平等—教育費調達分析から」 福原宏幸編『社会的排除/包摂と社会政策』 法律文化社、200-19。
- Bourdieu, Pierre (1986) *The Forms of Capital*, Richardson, John G ed. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press, 241-58.
- Chin, Tiffani and Phillips, Meredith. (2004) Social Reproduction and Child-rearing Practices: Social Class, Children's Agency, and the Summer Activity Gap, *Sociology of Education*, 77(3), 185-210.
- Corcoran, Mary (2001) Mobility, Persistence, and the Consequences of Poverty for Children: Child and Adult Outcomes, Danziger, Sheldon H and Haveman, Robert H eds. *Understanding Poverty*. Russell Sage Foundation, Harvard University Press, 127-61.
- Duncan, Greg J., Brooks-Gunn, W. J. and Smith, J. R. (1998) How Much Does Poverty Affect the Life Chances of Children?, *American Sociological Review*, 63(3), 406-23.
- Esping-Andersen, Gosta. (1998) Social Indicators and Welfare Monitoring., *Paper prepared for the 1999 Copenhagen Seminar for Social Progress, 16-19 September 1999*. (=2001、渡辺雅男、渡辺

- 景子訳『福祉国家の可能性 改革の戦略と理論的基礎』桜井書店。
- 浜島幸司 (2001) 「高校生の進路分化を規定する要因—全国公立高校生調査 (1999 年) から」『Sociology today』12、1-13。
- 苅谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機 不平等再生産から意欲格差社会へ』有心堂。
- Kelly, Harold H (1968) Two functions of reference groups., Hyman, Herbert H and Singer, E eds *Readings in Reference Group Theory and Research.*, The Free Press, 77-83.
- 小西祐馬 (2003) 「生活保護世帯の子どもの生活と意識」『教育福祉研究』9、9-22。
- Merton, Robert K (1957) *Social Theory and Social Structure.*, revised ed, The Free Press. (=1969 森東吾、森好夫、金澤実訳『社会理論と機能分析』青木書店。)
- 宮島 喬 (1999) 『文化と不平等 社会学的アプローチ』有斐閣。
- Nussbaum, Martha C (2000) *Women and Human Development: The Capability Approach.*, Cambridge University Press. (=2005、池本幸生、田口さつき、坪井ひろみ訳『女性と人間開発』岩波書店。)
- Rawls, John. (2001) *Justice as Fairness: A Restatement.*, Harvard University Press. (=2004、田中成明・亀本洋・平井亮輔訳『公正としての正義 再説』岩波書店。)
- 妻木進吾 (2005) 「第 1 章 本当に不利な立場に置かれた若者たち フリーターの析出に見られる不平等の世代間再生産」(社) 部落解放・人権研究所編『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』解放出版社、24-65。
- 内田龍史 (2005) 「第 2 章 ジェンダー・就労・再生産—社会的に不利な立場に置かれたフリーター女性の語りから」(社) 部落解放・人権研究所編『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』解放出版社、66-85。
- 安田 雪 (1998) 「職業アスピレーション：教育ネットワークか」1995 年 SSM 調査研究会『現代日本の社会階層に関する全国調査研究 第 9 巻 教育機会の構造』

(北海道大学大学院教育学院・修士課程)